

地元の人をもっと商店街に呼びたい!

学生目線で人と人をつなぐ、新しいまちづくりのカタチ

【経済学部】

長 崎市の新大工町商店街

は、長崎大学経済学部からもほど近い、市場を中心とした商店街です。八月五日・六日に行われた、恒例の「ふれあい夏まつり」に、今年は経済学部の学生が多数参加しました。オーブンングを飾ったのも、長崎大学よさこいチーム「突風」のパフォーマンス。近年、経済学部と新大工町商店街は協働することが多く、その背景には、特別な会議の存在がありました。津留崎和義准教授のお話です。

「大学が地域と連携して新しい動きを起こすため、行政、経済界の人たちと一堂に会する場をつくったのが二〇一四年。今ではそれを『みらい創造セッション』と呼び、定期的に開催しています。セッションには学生も自由に参加でき、毎回三十人以上が集まって語り合います。その中で、観光客を呼び込むためにも地元の人々が来なくなる魅力的な商店街づくりを考えようと盛り上がり、セッションに参加した経済学部生たちが動き出しました」。

今回の夏まつりサポートの中心となったのは経済祭実行委員会の宮本尚昌さん。

「経済祭は毎年十月に地域の方々と協働で行うのですが、今年は新大工町商店街とも連携できそうだなということ、まずは夏祭りを手伝うことに。店主さんたちとも相談しながら、出店の仕入れや集客の工夫、合唱団や演舞チームの出演交渉などに取り組みました。意識したのは商店街との関係性づくり。世代交代で切れてしまわないように、次の世代への顔つなぎはしっかりやります」。

六月には新大工町市場の一面に出来た「学生市場」がマスコミでも話題になりました。肉じゃがや麻婆豆腐など決まったメニューの食材や調味料を市場で調達し、一人分ずつ小分けして販売したのです。仕掛けたのは灘瑞穂さんと橋口浩暉さん。

「学生を市場に呼び込みたくて、まずは一人暮らしで自炊する新入生をターゲットにしました。試行錯誤の繰り返しで、狙っていた新入生がなかなか来ない代わりに一人暮らしの社会人や高齢の方々がリピーターになってくれ、意外なマーケットが発見できました」と灘さん。「そもそも新入生は自炊する人が少ない。マーケティング調査が甘かったですね。狙い通りに集客する難しさも、やってみて初めて分かりました」とは橋口さん。「売り上げをのぼすために会計学やマーケティングを実践的に考えたい。公共経済学や地域経済学ももっと勉強しなくてはと実感しました。この体験を経たからこそ、大学での学びのポイントがつかめて来ました」と二人は語ります。

また、まもなく形になりそうなのが龍野大貴さんや中村圭甫さん



現場で「実践力」を鍛える長大生
1

くじ引きとスライム作りのコーナーは予想以上に子どもたちに大うけで、結果的には黒字だったとか。スライムは市販のものだと安全性に疑問があったため、片栗粉を応用したところ、それがかえって子どもの興味をひいたようです。



商店街と学生のパイプ役として大活躍の草野一康さん(右)は、新大工町市場で惣菜店を営んでいます。「大学生の発想の豊かさや一生懸命さが我々の刺激になります。ときどきは失敗や脱線もあるけれど、それを次に生かしてくれれば問題なしです。次世代のモニターとしても貴重な存在ですよ」。



夏まつり1日限りの休憩所「シーハウス」は、野母崎の海水浴場から砂500kgをトラックで運んできました。「どうせなら本物志向で、野母崎の道路に大量の砂が打ち上げられて困っているという話を聞き、僕らがそれを車で運んで祭りに利用して、返すときに浜辺に戻せば、双方助かってWin-Winになります」と担当の学生。本番は子どもたちに大にぎわいでした。

のチームによる「シェアキッチン」。空き店舗にキッチンを据え、地元の人と学生と一緒に料理をするというプロジェクトです。

「学生と地域のシェアキッチンは全国にも例がありません。僕らがやってみようと思ったのは、調理を介した交流の場づくりです」とは龍野さん。自転車で日本を一周した中村さんは「旅先で、人と人がつながっている空間がその町をつくるということを感じました。そんな空間が長崎にもあれば」と参加。しかし交渉時には難航することもあります。「商店街や行政の方々と向き合う中で、自分の傾聴力が上がっている実感はあります。相手の話を聞いて頭で整理しながら、次の展開を引き出していく。これは、ビジネスの世界なら、お客様にヒアリングを行って真の課題を見つけ出していく能力

にもつながるのではないのでしょうか。予想外の展開に遭遇しても、プランBととらえて乗り越える気概と覚悟も必要です。中途半端では「どうせ学生がすることだから」と、商店街の人たちに悪い印象を持たれてしまう。始める以上、大学のためにもしっかりやらなければ」と龍野さん。

一方、大学の授業から発展した「サイバー商店街」は江下真央さんたちが進めている興味深い取り組みです。「西村宣彦教授から学んだ経営情報システム論を現実の商店街経営に生かせないかと考えました。店主の勘と経験で行われる仕入れや販売を、顧客データ管理アプリなどのICTツールを活用して効率化するものです。まずは協力店で試験的に運用して評価を得たうえで、将来的には学生がアドバイザー

ザーとなり活用を目指します」。そのため、受け皿となるNPO(Slope(坂道)と)peers(仲間)を掛け合わせて「Slopepeers」。長崎が元気になることを学生の力でやってみよう、いくつかの取り組みを事業化します」。津留崎先生のお話です。「学生たちは、大学で学ぶだけではもう飽き足らないのです。だから勝手に外へ飛び出して行く。一方で、学生を受け入れてくれる若手経営者がいます。そんな動きがシンクロして、偶発的に面白いものが生まれつつあるのです」。学生たちは、商店街で協働や対話を重ねながら新しいまちづくりを模索することで、大学での学びにもフィードバックしています。経済学部と新大工町商店街の動きから、今後も目が離せません。



学生市場で販売した小分けの食材セットは20食～50食。完売する日もありますが、売れ残ったときは市場の方がわざわざ買ってくれることも。「応援してくださった地域の方々の温かさに助けられました。だからこそ、今後の再開発の動きも他人事ではなく、すごく気になりますね」と灘さん。いつのまにか深い絆が生まれています。



「創成プロジェクト」でオリーブオイルの搾油機の小型化を目指す

長崎の新しい産業開発に参画する

ものづくりの難しさと、アイデアが形になる楽しさを実感

【工学部】

長

崎でも近年オリーブの栽培農家が増えています

「この七年で、延べ二十人の学生が関わってきました。これは企業の課題を学生と一緒に解決する産学官連携の『創成プロジェクト』の一つです。生産者や企業、大学、学生が連携しながら新しいものづくりを進めていきます。学生にとっては、貴重な学びの場にもなっています。昨年の『学生ものづくり・アイデア展』でも銀賞を受賞しました」。

現在オリーブオイルは大型の搾油機で大量にまとめて絞るのが一般的。しかし機械は輸入品で価格も高く、共同で使用するしかありません。無農薬などにこだわりながら生産する農家は個性を生かした独自のオイル生産を目指しており、小さくて価格も安い搾油機は市場ニーズが高いのです。機械はようやく試作品を作るところまでこぎ着けました。オリーブオイルの製造工程は、オリーブの実の粉砕↓攪拌↓ろ過という三つに分かれており、それを一つにまとめて小型化します。プロジェクトに携わる学生の一人が杉本大志さんです。



大村湾を見下ろす丘に広がる山崎さんのオリーブ畑で。右から小澤さん、山崎さん、矢澤先生、山田玲子技術職員、杉本さん、宮崎さん。

「僕は実を粉砕して遠心力で分離していく部分に羽根を付けるアイデアを出し、採用されました。小型化に当たって新しい工夫が必要だったのですが、市販のジュースミキサーのスクリーンをヒントに発想したものです。うまく回転させるための羽根の形状が難しく苦労しました。学部生は座学で一方的に知識を得ることが多いのですが、このプロジェクトに参加することで、問題点を見つけて解決策を考え、それを形にするチャンスに恵まれました」。

宮崎唯さんの担当は攪拌して練る部分。「羽根を何枚か組み合わせるので、しっかりと練ることができるように羽根の形や角度を調整しました。もともと電気系を学んでいたのですが、逆に単純な発想で突破できたこともありました。臆せず挑むことも大切ですね」。

模型や試作品の設計には小澤祐太さんが全力を注いでいます。「既製品のモーターを基本に、回転する速度や力を計算して設計するなど、大学で学んだ装置開発の基礎知識が生きますが、時には習っていないことに直面することもあります。例えば指定された設計ソフトを使って部品の設計をするよう言われたのですが、その使い方がわからない。そこで図書館や書店で本を探したり、インター

現場で『実践力』を鍛える長大生

2



試作機と試作機の模型を前にする学生たち。



オリーブの実実は10月から11月が収穫時期。しかも収穫して24時間以内に加工しないと酸化して鮮度が落ちてしまいます。厳しい条件だからこそエキストラバージンオイルの市場価値が見直されており、質の高い日本製品が待望されているのです。

ネットで調べたりして自学して、なんとか使いこなせるようになりました。また、小型化のために部品の特注を増やせば今度は価格が上がるといふジレンマにもぶつかり、既存のものをうまく使う技量も問われます。考えてみると、社会では仕事をまかされれば一から教えてくれる人がいるとは限りません。将来、装置開発の仕事に携わりたい僕にとっては、いずれぶつかる壁でもありました」。

三人とも、前例のないことを自分で調べる大事さや、自分のフィールド外の人の協働が新発想を導くことを知ったと口をそろえます。共同開発のパートナーである株式会社山見ユニティー会長の山崎勉さんにもお聞きしました。「学生のみならず同じテーブルでお互いアイデアを出し合うのは新鮮で楽しいですね。一方で、農家の方々の『早く欲しい』との声も高まってきました。製品化を急ぎたいと思っています」。

「学生の教育効果だけでなく、企業の時間感覚とのズレをなるべく少なくするために、間に入った我々教員も努力が求められます。とにかく今は、一秒でも早く製品化を！と学生には軽くプレッシャーをかけています(笑)」と矢澤先生。試作品が完成したら次はデータをとりながらさらに精度を高めて製品化へ。自分たちがつくった機械で絞ったオリーブオイルで料理する…。彼らのそんな夢が実現する日も、そう遠くないのです。

障がいのある人々の日常生活をサポート

普段の姿を知ること適切な寄り添い方を学ぶ

【医学部 保健学科】

あ る時は自閉症の子どもの
ちのキャンパスサポート。
またある時は福祉施設のイベント
のお手伝い。医学部保健学科の学
生で運営されるボランティアサー
クル「する〜ぶ」は、地域からの
要請をメンバーがLINEで共有
し、希望者が手を挙げる形で活動
が始まります。顧問でもある岩永
竜一郎准教授にお聞きしました。
「今年で八年目です。既存の医療
や福祉では対応できない場面に学
生が関わるといいうので、専門知
識を学んだ学生のみで構成されて
います。授業の実習は病院内での
患者さんの支援が多いのですが、
このボランティアでは、障がいの
ある方の日常生活のサポートが多
く、普段の姿を見て本音を聞き出
すこともできます。これは大学で
は知り得ない、我々も教えきれな
い事柄です」。

「する〜ぶ」部長の佐伯周さんのお話です。

「最初のころ、発達障害の子どものレクリエーションのお手伝いで出向いたものの、挨拶しても子どもが返答してくれなくて、戸惑いました。でも少しずつ打ち解けて、最後は手を振ってくれました。活動では、一人一人違う症状を把握するために保護者の方と会話しながら情報を共有していくなど、現実的な対処の仕方を学ぶことができます」。

ボランティア活動をしている学



長崎市の福祉施設「あじさいの家」の夏まつりでサポートする庄山創さん(写真左)と、利用者の車いすの介助をする渡木彩夏さん(写真右)。「障がいの重さによって対応を変えること、発作は突然起きることなど、現実に体験して初めて知ることばかりです。ボランティアで体験することで、もっと深く勉強しなくてはと気持ちを新たにしました」。

漁業者の生の声に耳を傾ける

現場で発見した課題を解決につなげる

【水産学部】

橘 湾の中でも波静かで水質
に恵まれた戸石の海。一
隻の漁船に同乗している水産学部
の学生たちは、揺れる船の上で持
ち込んだ機材を広げ始めます。海
水を採取し、塩分濃度の測定、採
取ポイントを確認しながらのラベ
リングと手際よく作業をする神近
卓弥さんと池北侑人さん。間もな
く着いたのはイワガキの養殖いか
だ。持ち主の福島政茂さんは、
ひよといかだに乗り移ると、か
ごを引き揚げ、大きなイワガキを
いくつか水揚げしました。このよ
うに手渡されたカキと数カ所です
取した海水を持ち帰り、有害なブ
ランクトンがないかどうか、大
学でさらに詳しく検査するので
す。実は二人は水産食品衛生学が
専門の高谷智裕教授の研究室の大
学院生。戸石にある長崎市たちば
な漁業協同組合では養殖カキの安
全検査を高谷先生に依頼してお
り、先生の監修の下で学生がサン
プリングを行います。「サンプル
の採り方は大学で映像などを見て
学ぶのですが、実際に現地では自
分でやるのは最初はすごく大変で
した……。まさに百聞は一見に如か
ず」と神近さん。池北さんは「サ
ンプル採取しながら漁業者の方々
とお話します。シーンと作業す
るのもつらいから(笑)。接する
中で大学で学んでいたことは違
うことも発見できます。例えば、
九十九島海域ではヒオウギガイと



右の神近さんが持つ望遠鏡のようなものは、海水の塩分濃度を測る機器。海水はプランクトンネットを使って数カ所です取するため、手分けして場所名をラベリングしていきます(右から2人目が池北さん)。操業を阻害しないよう、手際よく行います。



写真下/左が高谷先生。たちばな漁協ではフグやカキのブランド化に力を入れています。こういった市場の動きも現場で学べることのひとつ。

呼ばれる二枚貝が、ホタテガイの代用品としてさかんに養殖されていると聞いていたのですが、現場の関係者に聞いてみると、一団体あたり百円くらいで小遣い稼ぎ程度にしかならないとか。養殖の現状について詳しく調べてみようと思いました」。

高谷先生のお話です。

「実際の現場でどのような問題が起こっているかは、大学内で実験していても分かりません。漁業者の方々と接する中で、新たな課題やテーマが見えてくることも多々あります」。

もちろん、研究成果を現場にフィードバックして役立ててもらうことが大前提。現地では、今こんなことで困っている、次にこんな新しい事業にチャレンジしたいといった相談が持ちかけられることもあるといいます。

「自分たちが大学で学んでいる貝の毒化機構や減毒方法についての研究は、サンプルの貝を譲ってくれる漁業関係者がいてこそ続けられます。大学や研究機関と地域の相互の協力のうえに食の安全が成り立っていることが、よく理解できました」という神近さん。学生は、こうしてフィールドに出て現場の方々と接する機会を与えられることで、実践力や広い視野を自然と身に付けることができます。

生とそうでない学生では、実習での動きも違うと岩永先生。

「接し方に慣れていないと、何も言えずに黙ったまま。言葉で傷つけることを恐れるんですね。必要とされるコミュニケーション力、友達との付き合いやバイトだけでは身に付きません。ボランティアで身近に接することで、障がいのある方や子どもたちへの理解も深まり、寄り添い方が変わってきますよ」。

保健学科の場合、自閉症や発達障害、ダウン症など専門の教員がそろっており、それぞれの地域での活動から、支援ニーズや要請の声を拾いやすいのだとか。それが「する〜ぶ」にダイレクトに届き、素早く動けるメリットもあります。

「専門職を目指す者として、目の前の患者さんにどんな支援が最適なのかを考えさせられます。子どもたちの懸命に生きる姿に励まされ、目標を持てます。この経験は、社会に出たときに自分の力になります」という佐伯さんの言葉が印象的でした。



斜面地の空き家で長崎活性を考える

実際に住むことで見えてくること

【学生の自主参加】

「斜面地の活用は長崎が抱える課題でいくつか試みがされていますが、これもその一つ。僕はゆる〜く楽しみながら続けていきたい。最近長崎大学とのつながりも太くなくて、学生が斜面地の研究で取材にきたり、先生に依頼されて自治会を紹介したりしています。」
空き家と高齢者世帯が目立つ斜面地に「つくる」が出来たことで、若者が頻繁に行き来するように。自治会イベントやお盆の精霊流しの舟作りにも加わる彼らを、地元も好意的に受け入れています。ま



左が森さん、右が岩本さん。



この界隈の野の花を摘んで飾った「暮らしの花と茶の展覧会」の様子。メイドイン南山手のおしゃれなイベントには多くの女性が足を運びました。(撮影・山田早織さん)



現場で「実践力」を鍛える長大生

7

多業種との協働で 考え方や視点の違いに気付く

現場で「実践力」を鍛える長大生

6

【医学部 医学科 保健学科】

「師のたまご」、介護福祉士のたまご、栄養士のたまご——さまざまな専門職を目指す学生が大学の垣根を越えて連携して勉強会を行うのが「たまごの会」。「きっかけは、三年前の「NICIE キャンパスプログラム」でした。全国的に医療と福祉と一緒に学べる教育プログラムが少なかったのが、当時話題になりました。そこに参加した長崎大学の医学科の学生と長崎純心大学の現職、代福祉学科の学生が、さらに学び合うために自主グループを作ったのです」と語るの代表の内田直子さん。今で

は保健学科や活水女子大学の食生活健康学科の学生も集まります。お互いの分野を知ることで視点の違いに気付かされるのだそう。「例えば、僕は医学生は患者を前にすると、病気にばかり関心がいってきます。でも医療ソーシャルワーカーを目指す学生は、患者の環境や家族からも情報を集める。それが僕らには新鮮でした」と副代表の西迫広貴さん。会ではグループ別にテーマを決め、出生前診断や嚔下など、専門家を招いての勉強会を開催。今年も「認知症の人と家族の会」など地域の団体との交流も始めました。顧問の永田康浩教授のお話です。

「大学のカリキュラムはすべての学生を対象にするため、受動的な構成になりがちです。しかし社会に出ると自力でテーマを見つけることが肝心で、たまごの会は能動的な学習姿勢を身に付けながら、現場で求められる多業種連携やチーム医療を学生時代から体験できることに意義があります」。「地域医療の現場に出たときに、介護福祉士などと一緒に組む相手の仕事内容が分かるのは大きなメリットです。この問題はこの人に、というネットワークも今後は必要ではないでしょうか。そう語る内田さんのような新世代の医師が、ここから巣立っていくのです。

胃ろうについて学び、試みに栄養剤を飲むメンバー。施設見学などでも興味本位で終わらず、必ず報告会で情報発信して次の勉強会につなげ、深めていくのが会のルールです。



くり返し教えることで 処置法を体で覚える

【医学部 医学科】

昨

年行われた全国医学生 CPR（心肺蘇生法）選手権大会で五十校中三位という好成绩を取ったFLANは、一次救命処置の講習会を行うサークルです。部長の黒岩かほりさんに聞きました。「活動は学内外の学生対象の勉強会が中心ですが、先日は平戸で小中学校の先生とのワークショップを実施、近くの市立中学校でも定期的に講習しています。平易な言葉を選んでスライドに動画を盛り込むなど、どうしたら中学生が興味を持ってくれるかを工夫しています」。

顧問の長谷教子教授のお話です。「二〇〇四年にAEDが日本でも使用可能になり、一次救命処置の教育が急務となりました。しかし学校等での教職員の負担も大きいことから、医学生が指導者になれば……という背景があります。救急医療に関心の高い医学生を中心にサークルが出来ました。彼らを見ていて感心するのは、教え方にテンポがあって中学生の心をつかむのがうまいこと。学生から教わることで子どもたちも救急医療を身近に感じています」。



「心肺蘇生は誰でも覚えられものですが、リズムや強さなど、加減次第で血圧も変わり、トレーニングが欠かせません。とっさの判断で優先順位も考えなければならず、サークルで日常的に行うことで体が覚えて自然に対応できるようになりました」と黒岩さん。



「医学部に入学してすぐ、教室で人が倒れるのを見て何もできなかった悔しさがきっかけです」という学生も。トレーニングが功を奏して、歓楽街で酔っ払って階段から転げ落ちた男性に初期の救命処置をして救急車を呼んだ学生もいました。

現場で「実践力」を鍛える長大生

5

学生が現場で学べることは計り知れない



最後に片峰茂学長に全体を通してお話を伺いました。

—学生が、現場で学ぶ意義はどこにあるのでしょうか。

「一つは、多様性との出会いです。大学内ならば教員と学生だけの世界ですが、経済学部の『みらい創造セッション』のような開かれた会議では、経営者、行政、市民など、異なる価値観を持つ多様な人々と対峙しながら、自分の考えを伝えたり企画を提案したりする。多様性への理解が自然と生まれ、伝え方も鍛えられますね」。

—実際に現場に出てみると、大学で学んだ知識通りでなく、戸惑う学生もいるようです。

「ペーパードライバーが路上に出るようなものです。大学で学んだ知識はそれぞれ独立しており、それを生かすには、自分自身で体系づけることが必要です。“地図”を作る作業ですね。そうして初めて、各人の専門性が確立されていく。大学に戻ったときに、次の学びが見えてくるのではないのでしょうか」。

—学生のみなさんのコメントにも、そういう気付きが見られます。

「頼もしいですね。近年よく『地域のダイナミクス』という言葉を目にします。例えば、病院で寝たきりに近かった高齢者が退院して自宅に戻ると、目を瞪るほど活力を取り戻すことがあります。地域には、人との関わりや環境によって癒す力、モチベーションを上げる力があるのです。一方、長崎の地域の人たちにとっても、学生と関わることで刺激を受け、前向きになるなど相互作用が生まれます」。

—長崎大学は以前から、「現場力が個性」といわれています。なぜでしょう。

「一つには、どの学部にもフィールドワークを得意とする教員が多くいるからでしょう。教員が自らの研究をそれぞれが関わる地域に還元しているのです。アクティブラーニングを主体としたプログラムも各学部で活発に取り入れられています。今回のように、学生が主体的に現場に飛び込んでいくケースでは、教員自身も一緒に学ぶことができます。私が常々言っている『学びの共同体』です」。

—長崎大学では、昨年度採択された「COC+」という新しいプログラムが始まっています。

「長崎県の抱える課題に対し、県内の5つの大学が学びのプログラムを作るもので、産学官が一体となって進めています。『教育』『医療保健』『観光』『海洋エネルギー・海洋環境』の4つの課題が対象です。長崎大学では10月から『長崎地域学』の教育プログラムが始まりましたが、学生が長崎の地域の課題に目を向ける第一歩にしてほしい。今回の特集に登場する学生たちは、その先行事例とも言えます」。

長崎大学は大学全体で、学生が現場に出ている環境をつくり、その体験を専門分野に生かす仕組みを整備しているのです。



「学部によって課題の量も違うから、できる活動はそれぞれですが、時間の使い方のトレーニングにもなりますよ」と杉原さん。

実践力の習得をサポートする やってみゅーでスク

地

域と大学の間には多様な接点がありますが、長崎

大学の場合、地域のニーズと学生を結び付けるシステム「やってみゅーでスク」があります。今年で十一年目を迎え、すっかり定着しました。西田憲司マネージャーにお聞きしました。

「長崎県内は少子高齢化が著しく、地域コミュニティには若者の姿がありません。ここではボランティア学生の参画が喜ばれており、受け入れ団体も年々増えています。やってみゅーでスクでは、登録した学生に地域からの要請情報を流して参加を促しマッチングを行っています。現在、全学生の二十八％が登録しており、発足以来延べ一万人の学生が地域のボランティアに参加しました」。

近年は学生が主体的に企画するケースが増えているとか。

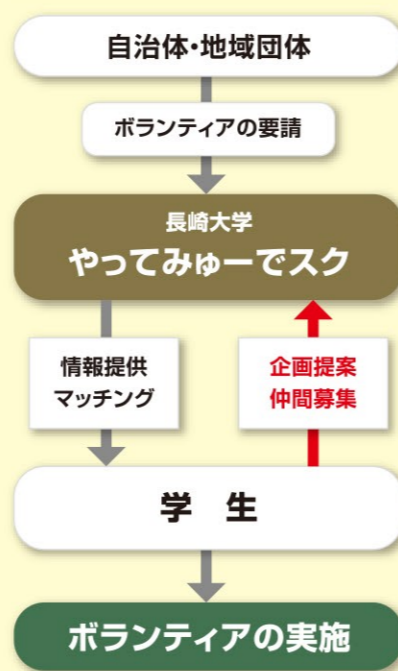
「はい、大学で学んだ専門性を生かした自主企画も次々生まれています。例えば歯科の国家資格を有する大学院生から、長崎の福祉施設でボランティアの歯磨き教室をやりたいと相談がありました。これも、受け入れ先を探して活動に必要な器具をそろえる援助をして、実現にこぎ着けました」。

実際に活動した橋原峻さんのお話です。

やってみゅーでスクからの紹介でボランティアをしたことをきっかけに、自力で興味のあるボランティア活動を始めたのが経済学部の杉原努さん。

「最初は子どもイベント『キッズタウン』のお手伝いから始めました。そのうち要領がわかってきたので、大村線沿線の駅の活性化プロジェクトや、学生が自ら観光大

やってみゅーでスクのシステム



長崎市内の福祉施設で歯磨き教室をする橋原峻さん、橋原春菜さん、四道玲奈さん。紙芝居も対象年齢を想定しながら何度も作りなおしたのだそう。

使になる全国組織など、自分で探して飛び込んでいます。視野が狭くて人見知りだった性格が変わってきたかな」。

まず「やってみる」、そこから始まる世界があり、現場でしか学べない経験があります。そのためにもちよつと背中を押すシステムがあることは、実践力を習得するチャンスを与えてくれます。

「やってみて分かったのは、対象の年齢層に合わせて道具ややり方を工夫したほうがいいということ。磨き残しを調べる試薬が思ったより効果を発揮しなかったり、歯ブラシの色を選べるようになったらかってケンカのもとになったりと、改善の余地がありました。しかし貴重な経験でした。これを継続して将来社会に出たときの力にしたいですね」。

「僕らはよく県内の福祉施設で歯科検診のお手伝いを行っています。そこで感じるのは、歯磨きがちゃんとできていないことで口腔状態が悪化しているケースが多いこと。それならば学生が自由に使える時間を利用して歯磨き教室をすることで、少しでも改善できないかと考えました」。

調べてみると、福祉施設の多くでは歯科検診はあっても歯磨き教室までは手が回らず、ニーズが高いという実態が見えてきました。さっそく長崎市郊外の福祉施設で初トライ。子どもたちを対象に紙芝居や試薬を駆使して磨き方を丁寧に教えます。

現場で『実践力』を鍛える長生

8